

目次			
第18回大会関連	P1	北京だより	P10
大会プログラム	P4	留学雑感	P10
島根県立大キャンパスマップ	P6	中国研究・隣接分野の動向	P12
書評セッション 文献案内	P6	事務局からのお知らせ	P15
島根県立大への旅程モデル	P7	編集後記	P16

## ■第18回大会関連

### □日中社会学会第18回大会を

#### お受けするにあたって

唐 燕霞

(第18回大会実行委員長・島根県立大学)

大会が第18回を迎えることになりました。今回はわざわざ島根までお越しいただくことでもあり、いくつかの試みをあわせて行いたいと思っています。開催校の所在地である浜田市は四方を海と山に囲まれた美しい町です。古より伝わる石見神楽に神々の鼓動と悠久の歴史を感じます。ぜひ石見神楽を味わいにいらっしやってください。

(1)特別講演は、島根県立大学の副学長から、北東アジア地域を念頭においた報告をお願いしました。島根県立大学は2000年4月に開学したばかりの、1学部2大学院研究科からなる小さな大学です。地政学的環境をも考慮に入れながら、島根県立大学では「北東アジア学の創成」を目指して精力的に研究活動を展開しています。この特別講演では、北東アジア地域研究に関する重要な視点が浮かび上がるのではないかと考えています。

(2)大会初日の夜の懇親会に石見神楽のアトラクションを設定させていただきました。これは今回の大会で初めて試みるイベントであり、浜田ならではの企画です。

(3)会員有志のご協力により、エクスカージョンを大会終了後に行うようにしました。せっかく地方で大会を開催するわけですから、歴史のある石見地方の文化遺産をご紹介しますと思います。

日中社会学会大会に関わる開催校連絡先は下記の通りです。

島根県立大学 総合政策学部  
唐燕霞研究室  
〒697-0016 島根県浜田市野原町 2433-2  
TEL 0855-24-2227  
FAX 0855-24-2293  
E-MAIL y-tang@u-shimane.ac.jp

## エクスカーションのご案内

大会終了後5日(月)には、エクスカーションとして石見银山などを訪問する予定です。当日帰りの交通の便に対応できる解散地・解散時刻にしたいと思います。参加費については、ガソリン代・高速道路代等の実費の頭割りを考えています。詳細については、大会時にご案内いたします。

## 宿泊予約のご案内

当日、浜田で卓球大会が開催される予定です。宿泊施設の混雑が予想されますので、お早めのご予約をお願いします。

### (1) 旅行会社をご利用の場合

農協観光浜田支店にとりまとめを依頼し、浜田ワシントンホテルを確保できるようにしております。(1泊朝食付き約9,000円)

同封のご案内と申込書を参照のうえ、旅行会社に直接ファックスで申し込むよう、よろしくをお願いします。申し込みの期限は5月12日(金)と、早めになっております。ご注意ください。

なお、この宿泊申し込みの際には、あわせて懇親会の参加とお弁当の注文も受け付けております。お申し込みをいただいた会員の方は、それ以降のご連絡は必要ありません。

### (2) 島根県立大学宿泊施設をご利用の場合

島根県立大学交流センターのゲストルームをご利用いただけます。

- ・ シングル1泊3,270円です。
- ・ 土日は食堂が営業していません。
- ・ 前もって申請書の提出が必要です。

ご希望の方は、唐燕霞までE-MAILでの申し込みをお願いいたします。先着順に受け付けをしていきます。

なお、部屋数に限りがあります。満室の際は

ご容赦ください。また、なるべく学生会員を優先したいと思っています。よろしく願いいたします。

申込先：唐燕霞 (y-tang@u-shimane.ac.jp)

### (3) その他の場合

浜田ワシントンホテル、島根県立大学交流センター以外の宿泊施設ご利用の場合は、会員各位でのご予約をお願いいたします。

## 交通機関のご案内

### 浜田駅から

#### 島根県立大学までのアクセス

#### 浜田駅から(所用時間約10分)

1. 路線バス(石見交通大学線ワンコインバス、運賃100円、30~60分間隔)
2. 特約：「浜田タクシー」0855-22-2000  
(4人グループ利用の場合、1人当たり約200円)  
プレートナンバー2000のタクシー車の運転手に日中社会学会参加者と言って下さい。
3. 一般タクシー(大学-浜田駅、約1000円)

#### 〈第18回大会開催要項〉

日時：2006年6月3日・6月4日

会場：島根県・島根県立大学

参加費：一般2000円 学生1000円

非会員2000円

懇親会費：一般6000円 学生3000円

(大会プログラムは4~5頁、会場地図や懇親会については別紙「ご案内」をご参照ください)

## □第 18 回大会 論著資料の配布コーナー及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（庶務担当理事・兵庫教育大学）

今大会も、大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置することになりました。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

## □第 18 回大会 中国の大学・中国の研究機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（庶務担当理事・兵庫教育大学）

前大会に引き続き、今大会でも、中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

# 日中社会学会第18回大会プログラム

6月3日(土)・6月4日(日)  
会場 島根県立大学

## 第1日 6月3日(土)

11:30 受付  
13:30 会長挨拶

### 13:35~14:50 特別講演(講義研究棟 中講義室3)

今岡 日出紀(島根県立大学)

「北東アジア研究のための3つの視角」

司 会

陳 立行(日本福祉大学)

### 15:00~17:00 分科会

#### 分科会A「中国からみる東アジア社会の新構想」(講義研究棟 演習室1)

司 会

南 裕子(一橋大学)

「現代中国の住民組織と自治 ——基層組織から見る中国の社会」 黒田 由彦(名古屋大学)

「中国進出日系企業の現状と課題」中村 良二(独立行政法人 労働政策研究・研修機構)

「中国企業の人材戦略」 李 尚波(桜美林大学)

「中国都市部の基層社会 ——北京市社区を事例として」 長田 洋司(早稲田大学大学院)

「道教にかかわるセーフティネットの位置づけ」 松木 孝文(名古屋大学大学院)

#### 分科会B「東アジアの『越境』が秘める可能性」(講義研究棟 演習室2)

司 会

永野 武(松山大学)

「移動する中国商人—歴史からみるその移動空間」

陳 捷(愛媛大学)

「『民工』子弟の教育問題と86年義務教育法改正論議」

宮崎 満(松山大学大学院)

「中国における<民族>の起源 ——孫文はいかにして「民族主義者」になったのか」

穂山 新(筑波大学大学院)

「『中国帰国者』の歴史/社会的形成 ——国家、エスニシティ、コミュニティー」

南 誠(京都大学大学院)

「中国人の対日意識とブランド志向」

石井 健一(筑波大学)

### 17:20~18:20 総会(講義研究棟 中講義室3)

19:00~ 懇親会(浜田ワシントンホテル)

第2日 6月4日(日)

9:00～ 受付  
9:30～12:00 一般自由報告

一般自由報告A (講義研究棟 中講義室3)

司 会 文 楚雄 (立命館大学)  
『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって：日本ホラー映画要素の香港化について 吳 偉明 (香港中文大学)  
「改革開放後における中国社会の『文化的目標』をめぐって」 王 鳳 (立教大学)  
「日中実業家の『公』の思想－渋沢栄一と張謇を例に」 于 臣 (島根県立大学)  
「植民地経験の聞き取り実践－黒龍江省東寧県を事例として」 坂部 晶子 (島根県立大学)  
「満州国」における衛生事業の展開と日本の影響」 趙 曉紅 (島根県立大学大学院)

一般自由報告B (講義研究棟 中講義室5)

司 会 東 美晴 (流通経済大学)  
「中国社会構造と欧州社会構造」 宮内 紀靖 (中国瀋陽師範学院)  
「中国太湖における住民生活と漁業の変化」 楊 平 (筑波大学大学院)  
「中国中年世代の家族キャリアと職業キャリア  
——北京におけるインタビュー調査からの一考察」 辺 静 (お茶の水女子大学大学院)  
「中国におけるソーシャルワーク専門教育の現状と課題」 包 敏 (広島国際大学)  
「家族の近代化に関わる収斂理論と分散理論の一考察  
——日本、中国大陸、台湾における調査研究から」 ライカイ ジョンボル (京都大学大学院)

12:50～14:20 書評セッション (講義研究棟 中講義室3)

細谷昂・佐藤利明・小林一穂・吉野英岐・劉文靜『再訪・沸騰する中国農村』御茶の水書房 2005年  
司 会 小林一穂 (東北大学)

14:40～16:00 ミニシンポジウム「渾沌と中国社会を語る」(講義研究棟 中講義室3)

報告1 「『渾沌』と中国における社会変動の担い手」 中村 則弘 (愛媛大学)  
報告2 「多元的世界としての中国を考える」 東 美晴 (流通経済大学)  
コメンテーター 根橋 正一 (流通経済大学)  
司 会 唐 燕霞 (島根県立大学)

受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー (論文の抜刷やコピー, 調査報告書などの配布)
- 書籍販売コーナー (著者割引での販売など)
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー (資料やコピーなどを置いておく)
- その他 (若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など)

\*プログラムは一部変更となる可能性があります。当日会場にて配布される資料でご確認ください。

## 島根県立大キャンパスマップ



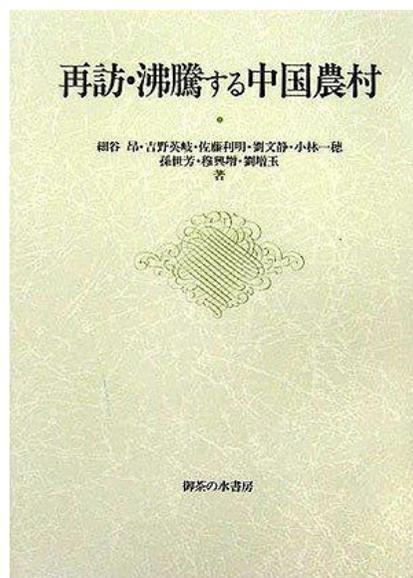
### <書評セッション 文献案内>

細谷 昂・佐藤利明・小林一穂・吉野英岐・劉文静『再訪・沸騰する中国農村』

御茶の水書房 (2005年12月出版) 価格: ¥8,610 (税込) ISBN: 4275004035

### [目次]

- 第1章 調査の方法と対象
- 第2章 家族生活の実態
- 第3章 新壘頭村の行政組織と地域生活
- 第4章 市場経済化と農産物の販売
- 第5章 民営企業と環境問題
- 第6章 辛集市の農業構造と農業政策
- 第7章 土地制度と土地利用の状況
- 終章 「沸騰する中国農村」を再訪して



## ～☆～ 旅程モデル ～☆～

### ☆東京からの旅程モデル（往路）

東海道・山陽新幹線利用，広島駅経由で長距離バス利用の場合

- ・ [のぞみ5号] 東京駅 6:50 ——— 名古屋駅 8:34 ——— 新大阪駅 9:29 ——— 広島駅 10:51
- ・ [長距離バス] 広島駅新幹線口 11:10 ——— JR 浜田駅 13:18
- ・ [タクシー] JR 浜田駅から会場（島根県立大学）まで10分程度
  - \*路線バス利用の場合は、14:00 発になります。会場まで10分程度
  - ⇒ 第1日の特別講演（13:35～）にギリギリ間に合います。
  - ⇒ 第2日の書評セッション（12:50～）の途中から参加になります。

### 航空便利用の場合(1)

- ・ [全日空 ANA575] 羽田空港 6:55 ——— 萩・石見空港 8:25
- ・ [路線バス] 萩・石見空港 ——— JR 益田駅 15分程度
- ・ [JR] 益田駅 ——— 浜田駅 40分程度
- ・ [路線バス] JR 浜田駅 10:00 発，10:31 発、会場（島根県立大学）まで10分程度
  - ⇒ 第1日の特別講演（13:35～）に十分な余裕をもって間に合います。
  - ⇒ 第2日の一般自由報告（9:30～）の途中から参加になります。

### 航空便利用の場合(2)

- ・ [全日空 ANA1651] 羽田空港 13:00 ——— 大阪（伊丹）空港 14:45 ——— 萩・石見空港 15:50
- ・ [路線バス] 萩・石見空港 ——— JR 益田駅 15分程度
- ・ [JR] 益田駅 ——— 浜田駅 40分程度 17:00 ごろに到着
  - ⇒ 移動のみになります。大会への参加は翌日。

### 夜行バス利用の場合

- ・ [いわみエクスプレス] JR 新宿駅新南口 19:10 ——— JR 浜田駅（翌朝）7:15
- ・ [路線バス] 8:00 から2時間に3本の割合 会場（島根県立大学）まで10分程度
  - ⇒ 第1日の特別講演（13:35～）に十分な余裕をもって間に合います。
  - ⇒ 第2日の一般自由報告（9:30～）に十分な余裕をもって間に合います。

## ☆大阪からの旅程モデル（往路）

山陽新幹線利用，広島駅経由で長距離バス利用の場合

- ・ [のぞみ1号] 新大阪駅 8:32 —— 広島駅 9:52
- ・ [長距離バス] 広島駅新幹線口 10:20 —— JR 浜田駅 12:28
- ・ [路線バス] JR 浜田駅 12:31 発，13:00 発、会場（島根県立大学）まで10分程度  
⇒ 第1日の特別講演（13:35～）に間に合います。  
⇒ 第2日の書評セッション（12:50～）にギリギリ間に合います。

航空便利用の場合

- ・ [全日空 ANA1651] 大阪（伊丹）空港 14:45 —— 萩・石見空港 15:50
- ・ [路線バス] 萩・石見空港 —— JR 益田駅 15分程度
- ・ [JR] 益田駅 —— 浜田駅 40分程度 17:00 ごろに到着  
⇒ 移動のみになります。大会への参加は翌日。

夜行バス利用の場合

- ・ [ツワノエクスプレス] 大阪（ハービス OSAKA）22:40 —— JR 浜田駅（翌朝）5:30
- ・ [路線バス] 8:00 から2時間に3本の割合 会場（島根県立大学）まで10分程度  
⇒ 第1日の特別講演（13:35～）に十分な余裕をもって間に合います。  
⇒ 第2日の一般自由報告（9:30～）に十分な余裕をもって間に合います。

## ☆東京への旅程モデル（復路）

長距離バス利用，広島駅経由で東海道・山陽新幹線利用の場合

- ⇒ 第1日午後の分科会の途中退出（16:00 ごろ）
- ⇒ 第2日午後のミニシンポジウム終了後退出（16:00 ごろ）
- ・ [長距離バス] JR 浜田駅 16:40 —— 広島駅新幹線口 18:45
- ・ [のぞみ48号] 広島駅 19:00 —— 新大阪駅 20:30 —— 名古屋駅 21:25 —— 東京駅 23:06

航空便利用の場合(1)

- ⇒ 第1日午後の特別講演の途中退出（14:20 ごろ）
- ⇒ 第2日午後の最初のプログラム終了後退出（14:20 ごろ）
- ・ 会場から萩・石見空港まで約70分（15:30 ごろ）
- ・ [全日空 ANA1652] 萩・石見空港 16:15 —— 大阪（伊丹）空港 17:15 —— 羽田空港 19:10

#### 航空便利用の場合(2)

- ⇒ 前日最後まで大会に参加，当日は移動のみ
- ・ 浜田駅周辺から萩・石見空港まで約 70 分
- ・ [全日空 ANA576] 萩・石見空港 9：30 —— 羽田空港 10：55

#### 夜行バス利用の場合

- ⇒ 第 1 日，第 2 日とも、最後まで参加（懇親会はのぞく）
- ・ [いわみエクスプレス] JR 浜田駅 19：50 —— JR 新宿駅新南口（翌朝）7：50

### ☆大阪への旅程モデル（復路）

#### 長距離バス利用，広島駅経由で山陽新幹線利用の場合

- ⇒ 第 1 日午後の分科会の途中退出（16：00 ごろ）
- ⇒ 第 2 日午後のミニシンポジウム終了後退出（16：00 ごろ）
- ・ [長距離バス] JR 浜田駅 16：40 —— 広島駅新幹線口 18：45
- ・ [のぞみ 48 号] 広島駅 19：00 —— 新大阪駅 20：30

#### 航空便利用の場合

- ⇒ 第 1 日午後の特別講演の途中退出（14：20 ごろ）
- ⇒ 第 2 日午後の最初のプログラム終了後退出（14：20 ごろ）
- ・ 会場から萩・石見空港まで約 70 分（15：30 ごろ）
- ・ [全日空 ANA1652] 萩・石見空港 16：15 —— 大阪（伊丹）空港 17：15

#### 航空便利用の場合

- ⇒ 前日最後まで大会に参加，当日は移動のみ
- ・ [全日空 ANA025] 大阪（伊丹）空港 14：45 —— 萩・石見空港 15：50
- ・ [路線バス] 萩・石見空港 —— JR 益田駅 15 分程度
- ・ [JR] 益田駅 —— 浜田駅 40 分程度 17：00 ごろに到着

#### 夜行バス利用の場合

- ⇒ 第 1 日，第 2 日とも、最後まで参加（懇親会も参加可能）
- ・ [ツワノエクスプレス] JR 浜田駅 23：35 —— 大阪（ハービス OSAKA）（翌朝）6：23

## ■北京だより

### 「中国の社会変動からみた 東アジア社会発展の新たな構想」研 究交流会を開催予定（今夏）

出和暁子（中国社会科学院）  
池本淳一（中国社会科学院客員研究員・  
大阪大学）

本年3月末、日中社会学会会長の中村則弘氏が北京を訪れ、中国社会科学院社会学研究所前研究所長陸学芸氏と、現副所長李培林氏の両氏と、今後の日本と中国の社会学領域における学术交流の基本枠組みを話し合い、以下のような合意に至った。

まずは今夏、北京にて「中国の社会変動からみた東アジア社会発展の新たな構想（从中国的社会变迁看东亚社会发展的新的构想）」と題した学术交流交流会を開催する。会期は2日間を予定している。

本会は、中日社会学会の正式な設立を記念し、日本、中国双方の研究者が集い、活発な討論、学术交流を行うものである。また、『日中社会学叢書（研究論文集）全7巻』（明石書店）の出版に向けて、同叢書の日本、中国双方の編集者・執筆者が報告し議論を行う。

さらに、今回の陸学芸氏との会談では、中日社会学会の正式な批准・発足に当たっては、具体的な準備作業や手続きが必要ではあるものの、今夏の当研究交流会開催に向けて尽力を尽くすとの合意に至った。

## ■留学雑感

### 熱情と恩義の間

池本淳一（中国社会科学院客員研究員・  
大阪大学）

大家好！中国社会科学院の訪問学者・池本です。私は今、北京にて明日からの上海調査の準備に勤しんでおります。ここ北京ではただいま黄砂の真っ盛り。外から帰るとまず洗顔とうがいが必要な毎日です。あと風が凄いです。よく中国語の教科書に「春天刮风大」なんていう例文がのっていますけど。今までは「まったく風ぐらいでなにを大げさな」と思っていましたけど…あまりの強風で息ができず、地上で窒息死しそうになりました。

というわけで、春なのにまったく和めない日々をすごしておりますが、それでもつい先日まで調査に出かけていた撫順に比べれば、ずいぶんとここは過ごしやすいものです。撫順での調査内容の方はいずれどこかでお目にかけていたいと思いますので、今回の雑感では調査のさいの四方山話でお耳汚しをしたいと思います。

撫順には、大連留学中に知り合った武術友だちの「お父さん」（元武術教師）のライフヒストリーの聞き取りをメインに、撫順市の若者の就業／進学意識の予備調査をサブとして訪れました。期間は春節からの約一ヶ月間。調査中はその友人宅に居候させていただきました。しかしここで予想もしない事態が。二月の撫順は、最低気温マイナス32度、最高気温マイナス20度という極寒の地だったのです。昔、「マイナス何十度の世界ではバナナで釘が打てます」というCMがありましたが、実際そんなところにいると、バナナで釘を打つ気力さえなくなります。

このような寒さのため、ご家族の誰もが敢えて外出しようとはしませんでした。しかしそれが幸いして、家の中で一日中インタビュー三昧、という調査としては大変恵まれた環境を得ることができました。また主なインタビューであった「お父さん」は数年前から高血圧をわずらっており、お酒がほとんど飲めませんでした。それゆえ「中国調査のイニシエーション」である「白酒漬け」もなく、

毎日しらふでお話をうかがうことができました。

しかしながら、私は中国語を学んでまだ日も浅く、普通語ならなんとか聞き取りできるものの、地方語である撫順語はなかなか聞き取れませんでした。それゆえはじめのころは、聞き取れた！と思った内容をいちいち私が普通語で言いなおし、聞き取れているかどうかを確認する、という手順を踏んでいました。このようなふがない調査者である私に対して、「お父さん」は根気よく何度も何度も繰り返しお話ししてくれました。

ただ、こちらの風習なのか、お父さんの性格なのか、とにかく声が大きい。特にこちらが聞き取れないときは、「お父さん」の声はどんどん大きくなっていきます。こちらも必死で聞き返すのでついつい大声になり、最後にはお互い大声で問答しあう「叫ぶ調査の会」といった様子となりました。

このように調査は順調？に進んだのですが、ここで一つ問題が。お父さんは高血圧気味で、「叫ぶ調査の会」が順調に進めば進むほど、お父さんのテンションと血圧は上がりっぱなしとなります。しかしお父さんは自分のことはかまわずに、暇があれば家の中でいつでも「叫ぶ調査の会」を催してくれます。

こうしてお父さんの血圧は日に日に不安定になっていきました。このままではお父さんが倒れてしまう、と思った私は、途中、何日か口実を作り、家を出て市内をぶらつくことにしました。しかし撫順は日中でもマイナス20度。市内観光や散策といっても、そんなことをすれば私で釘が打ててしまいます。しかたないので、お父さんの体調が悪い日は、朝ご飯をいただいてからすぐにバスに乗って市内に向かい、昼間はずっと市内のネットカフェにこもり、お父さんが就寝する六時以降にこっそりと帰宅していました。

今、日本では調査倫理や「対象者との距離／接し方」といった議論が盛んだそうですが、

中国での調査の場合、しばしば調査対象者が「熱情」的に協力してくれます。しかしその「熱情」にどこまで甘えていいものか。またその「熱情」に報いるためには何をすべきなのか。

自分の体調を気にせず、熱っぽく語ってくれるお父さんと私の関係を鑑みるに、今後いろいろと考慮しなければならないと実感しました。それは『文化を書く』や「知の植民地主義」といった議論とはまた別次元の問題のような気がします。そもそも、相手の好意に報いる、という考え方自体、ある種傲慢で自己満足的な気もしますし…。今回の場合、自分なりに考えたすえの「恩返し」は、武術友だちの進学相談に親身になってのることと、大連に一時帰還したおりに、彼にそれはもう「熱情」的に秘密の？武術の技を教え込む、ということでした。

このように私の場合は、「武恩をもって武恩を返す」という、武術家的な回答を試みたわけですが。みなさんご承知のように、中国での調査は「関係」を通じてでないともそもそも調査地に入れない、そして調査地で個々の関係を構築してから初めて実質的な調査が可能となります。実際私自身、日本での調査経験と中国でのそれを比べると、中国の方が個人的な人間関係やラポールの問題が、調査そのものの成立基盤にあるように思います。このどうやっても「部外者」の位置には入れない、言うなれば「感情」や「情誼」の交換を通じてのみ調査が成立しうる中国というフィールドからこそ、『「人と人」の関係としての社会調査』のあり方を問い直すことが出来るのではなからうか…そんなことを、ネットゲームに熱中する若者たちにまざりながら、ネットカフェで一人考えていました。

というわけで、今回は上海調査についてお伝えしたいと思います。それでは、今回は雨と湿気の上海からお伝えしたいとおもいます。

### ある社会学者の夢と現実

イスト＝「東京社会学インスティテュート」のこと

西原和久（名古屋大学）

学会事務局から、「イスト」＝正式名称「東京社会学インスティテュート」（略称 ist）に関して一筆書いて欲しいという依頼を受けた。まだそれほど実績のない新たな機関なので、依頼を受けるかどうか躊躇した。だが、これを機に、イストの新たな展開可能性が開けるかもしれないと思い直して、執筆をお引き受けした。この「決断」には若干の理由＝わけがある。以下で、これまでの活動と現在、そして未来を語りたいと思う。

昨年（2005年）4月、イストは発足した。東京千代田区のビルの一角に小さな事務所を設けた。設立の理念は3つあった。①社会学を核とする現代社会研究、②社会構想の考案、③アジアとの連帯＝世界との交流、である。そして、具体的活動としては次の4つの機能を発揮したいと考えた。1)フォーラム機能、2)セミナー機能、3)シンクタンク機能、そして4)プレス（出版）機能、である。2005年10月、イストは特定非営利活動法人つまりNPO法人として認証された。中核メンバーは理事長をふくむ9名。NPO法人の法人登記は、東京と群馬でおこなった。

まず、中国やアジアとの関係の重要性に「目覚めた!？」理事の一人、筆者・西原が中心となり、昨年5月以降セミナー活動を実施した。受講生として中国からの留学生をも念頭に置いた「社会学」を教授したいという思いもあって開始したセミナー活動は、金曜夜と土曜午後「社会人向け」と「学生向け」のセミナーを柱とした。前者は「グローバル化と現

代社会」、後者は「社会学史／社会学概論」がテーマであった。部分参加を含む受講生は、前者が5名、後者が6名であった。ホームページとロコミだけの宣伝しかしなかった割にはそれなりに受講生が集まったと考えていたが、肝心の中国人留学生は来なかった。宣伝方法に問題があったという点と、（講師はボランティアで無給だったが）場所代とテキスト代の徴収が受講生には負担だったかもしれない。

ただし、学生向けのセミナー受講生の中から、慶応、上智、東京学芸大などの大学院の合格者が生まれ、社会学研究の裾野の拡大という活動目標の一つは達成しつつあるように思われた。そして、申請していたNPO法人化も秋に実現した。この法人化後の昨年秋、このセミナー機能とならんで、フォーラム機能と出版機能も活動計画が進展し、いよいよ実施の段階に入りかけていた。したがって、昨秋からが、このNPOにとって本格的活動の出発点であり、かつ正念場であった。

だが、この原稿を書いている2006年4月をもって、東京・千代田区の事務所は閉鎖を余儀なくされたのだった。理由はいくつかある。第1に、このNPO法人の中核メンバーの多忙が原因で活動になかなか時間がとれなかったこと、第2に、セミナー活動に「予備校まがい」と外部からクレームがついたこと、第3に、経済的負担が大きくなったこと、である。ボランティアで活動することの難しさ、現実の壁を、この時点で実感させられた。

しかしながら、ここで活動を全面撤退することなどまったく考えてはいない。むしろ、夢はどんどん広がる。当面は、体勢を立て直して、まずやれることからやろう。そう思い直した。

まず、昨秋から計画している出版活動であれば、事務所を必ずしも必要とせず可能だ。

そして、その出版計画に今年に入ってから全力を投入し始めた。そこに、中国をはじめとして「アジア」を強く意識した「つながり」を絡ませたい。したがって、具体的な活動は当面、次のようなプランに従って動き出すことになった。

①これまで筆者は15年間、「現代社会理論研究会」を主宰してきた。それは、研究会誌『現代社会理論研究』を核とした会員数400名弱の「同人会」であるが、そこで一昨年、昨年と筆者を責任編集者とする「グローバル化時代における東アジアの社会学理論」という「特集」を編んだ。この二年間にわたる特集で、中国人社会学者5名(中国社会科学院、南京大学、華東師範大学、吉林大学、香港理工大学の教授等)、台湾・中央研究院3名、他に韓国3名、タイ1名の執筆陣を得た。なお、翻訳には名古屋大学の中国人留学生などに尽力いただいた。そして、この活動をも踏まえて、新たなプランの実行段階に入った。

すなわち、この会は今後、学会化する(「日本社会学理論学会」として設立準備委員会が発足し、本年7月に設立大会を予定している)。同時に、この研究会がもっていた「同人会」的要素はイストが引き継ぎ、新雑誌『コロキウム:現代社会理論研究・新地平』として、東京の出版社・新泉社の助力をえて、本年5月に創刊号が刊行される(もちろん一般書店で購入可能である)。そこには、中国(浙江大学)や台湾(国立成功大学)、およびインドの社会学者の論文などが掲載される。このように、これまで『現代社会理論研究』が雑誌という媒体で行ってきた中国をはじめとするアジアの社会学者との交流を、今度は『コロキウム』というイストの新たな雑誌で継続していきたいと考えている。もちろん今後は「一般投稿」も予定し、中国をはじめとするアジア各地からの留学生の「研究成果」を公表するスペースも確保したいと考えている。

②つぎに、このような出版活動を、さらに

単行本や翻訳などの書籍としての出版活動に結びつけていく計画である。現在具体化しているのは、シリーズ『イスト・ブックス』の刊行である。現在すでに7冊の出版計画があり、今秋から次々と刊行され始める予定だ。刊行の目的の一つに、「グローバル化時代におけるアジアを考える」、という項目がある。最初の刊行は「グローバル化とアジア」、「東アジアの環境問題」、「説き語り現象学的社会学・入門—国境を越える想像力—」などが予定されている(ただし、書名は最終決定ではない)。さらに、この『イスト・ブックス』の刊行と同時に、『グローバル化時代の社会学・入門』など、外国人留学生も読むことが可能な入門書や概説書も計画されている。

なお、以上の企画はすべて、上述の「新泉社」との協働作業である。刊行の趣旨に賛同いただける限り、アジアからの、あるいはアジアに関わる新たな書き手にも加わっていただきたいと切望している。

③そして、次なる目標は、このような雑誌や著作の刊行を当面の媒体として、そう遠くない段階で「東アジア社会学理論研究者ネットワーク」を構築すること、である。それは、当座は緩やかなネットワークであろう。だが、筆者が南京大学客員教授をしばらく続けることになっているので、日中を核として、そしてインドをも巻き込んだ形で「東アジア」の連帯を模索したいと考えている。上述の『コロキウム』には、インド社会学の第一人者アン Dre・ベテイ教授の論考が掲載される。少しずつではあるが、このようにして「西洋生まれの社会学」を学ぶ者同士の、「アジアにおける横の連帯」を模索したいと考えている。

④しかし、「アジアの連帯」の道筋はいくつもあるだろう。たとえば、私の知り合いの元中国人留学生が、南京に「イスト」をつくりたいと申し出てくれた。「南京イスト」である。ここからは全くの夢物語であるが、私の周りで社会学研究を始めている留学生が、例えば

今後「上海イスト」や「台北イスト」、あるいは「香港イスト」などを作って、この輪が広がってくれたらいいと夢想している。もちろん、名称には全くこだわりがない。そもそも「イスト(ist/IST)」というのは「Institute for Sociology in Tokyo」の略称なので、「南京イスト」というのは明らかに形容矛盾である。しかしその矛盾はどうでもよい。イストが固有有名化するほど一般化して、その「連帯」の実質的な活動がなされていくことが重要だ。そうした「夢」が、いま広がっている。……しかしながら、夢の話はここまでとしよう。

\* \* \*

冒頭で述べたように、このNPO法人「東京社会学インスティテュート」は、まだ歩き始めたばかりの「よちよち歩き」の幼児である。しかし、前述したようなこれまでの筆者の活動、例えば『現代社会学理論研究』刊行15年のノウハウを生かしながら、しかも昨年からは押命した南京大学客員教授（今年9月には南京大学で終身資格としての「名誉教授」の授与式が予定されている）の立場・資源も有効に活用して、このNPO活動を中国およびアジアに向けて発信しながら、そこでの「連帯」をグローバルな視線をもって展開したいと考えている。

筆者は昨年からは、日本学術会議の「連携会員」となり、かつてはユネスコの一翼として出発し、現在は独立した機構となった「アジア社会学者協議会連盟」の担い手の一人として、2007年に名古屋においてこの機構の国際大会開催を予定している。また、最近ではアジアへと活動域を広げ、関連著作の中国語訳が進行中の「公共哲学・京都フォーラム」と連携する活動も行ってきた（「公共哲学・京都フォーラム in 名古屋大学会議」[この内容は著作として刊行予定]や「公共性をめぐる日中座談会」[この内容は京都フォーラム月刊誌『公共的良識人』本年4月号に掲載された]）。さらに日本の研究者と南京大学との共同シン

ポジウムも2回、各々の国で開催された。こうした活動とも連携しながら、長い歴史を持つ「日中社会学会」に今回加入させていただいたのを機に、ぜひとも日中社会学会員の有志とも連携しながら、「グローバル化時代のアジアの連帯」に尽力したいと考えている。

実績の乏しい、歩き始めたばかりの新たな試みを、少し書きすぎたかもしれない。以上は、筆者の「夢」物語にすぎないところも多い。しかし、「夢」を持つことは、人間である限り、とても重要なことだと最近痛感している。「夢」を持ってない状態ほど怖いものはない。「夢」を共有できる人たちと「夢」を語り合いたい、と強く願っている。わざわざこの場を借りて「夢」物語を述べさせていただいた理由＝わけが、ここにある。執筆を依頼して下さった事務局の方々、そしてこのコラムを読んで下さった方々に厚く御礼申し上げたい。（名古屋大学大学院環境学研究科／文学部・社会学講座・教授）

## ■事務局からのお知らせ

### □機関誌編集進行状況について

『日中社会学研究』第14号は、第1回の査読を終えようとしています。今秋発行を目指し、なるべく次号のニュースと一緒に郵送したいと思います。

### □大会出欠のお返事について

大会および懇親会の参加者数について、なるべく正確な人数を把握しておきたいと思えます。次のいずれかの方法により、ご連絡をお願いいたします。

#### (1) 同封の「日中社会学会 宿泊・弁当・懇親会申込・確認書」用紙をご利用のうえ ファックスによるお返事

期限は 5月12日(金) といたします。

浜田ワシントンホテルの宿泊をご希望される場合には、この方法をお願いいたします。

また、浜田ワシントンホテルの宿泊をご希望なされない場合でも、この方法により、お弁当と懇親会の申し込みが可能です。

申し込みをなされた後でのご変更は、旅行会社（農協観光）へ直接お願いいたします。以下の(2)、(3)によるお返事は必要ありません。

#### (2) 同封の「日中社会学会大会参加・弁当・懇親会申込書」返信用ハガキによるお返事

恐れ入りますが50円切手を貼っていただき、5月22日(月)までに投函していただくようお願いいたします。宛先は事務局担当の永野です。

内容は、大会への出欠、お弁当と懇親会の申し込みとなっております。

投函後のご変更は、次の(3)の方法により、お願いいたします。なお、お弁当と懇親会については、大会が近づいてからのご予約取り

消しを受けかねる場合がございます。よろしくをお願いいたします。

ご変更がない限り、(3)によるお返事は必要ありません。

#### (3) E-MAILによるお返事

同封の返信用ハガキをご参照のうえ、大会への出欠、お弁当と懇親会の申し込みを、以下の宛先に、5月24日(水)までに送信していただくようお願いいたします。

宛先

nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp

または

nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp

(2)の場合と同様に、お弁当と懇親会については、大会が近づいてからのご予約変更を受けかねる場合がございます。よろしくをお願いいたします。

なお、島根県立大学交流センター宿泊の申し込みをなされた方も、この方法によりご連絡をいただければ幸いです。

## ■編集後記

第18回大会関連の記事でお知らせしましたように、本年度の大会は島根県立大での開催となります。エクスカージョンの実施など、山陰地方開催という地の利を生かした企画も提供されています。大会実行委員長をはじめ、大会主催校の関係者の方々には、大会の準備のために、たくさんのご助力とお骨折りをいただいております。感謝の念に耐えません。会員諸氏の数多くのご参集によって、大会が盛況であることを願ってやみません。(首藤)

事務局・業務担当：吉岡智子  
e-mail:nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp  
tel・fax:089-927-9366

---

**日中社会学会ニューズレター No.47**

発行：日中社会学会事務局  
〒790-8578  
松山大学人文学部永野武研究室  
e-mail:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp  
tel:089-926-7451 (研究室直通)  
fax:089-922-5415 (大学事務局)

日中社会学会・郵便口座 口座記号番号：00140-9-161801 加入者名：日中社会学会 日中社会学会・公式HP <a href="http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/5938/">http://www.geocities.co.jp/ CollegeLife-Labo/5938/</a>
--

◎編集担当  
首藤明和(shuto@hyogo-u.ac.jp)

発行日：2006年5月